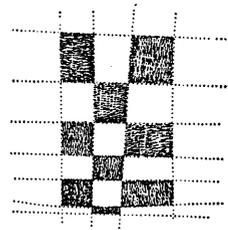


ニュージーランドにおける

## 就学前教育の歴史ならびに現状 (三)



松川由紀子

### 二一九二〇年、三〇年代の フリーキンダーガルテン

この章では、一九二〇年、三〇年代のフリーキンダーガルテン運動の発展について述べたいと思う。

一九二〇年、ニュージーランドにおいては、既述した四つの都市（ダニーデン、クライストチャーチ、ウェリントン、オークランド）に数カ所ずつ、合計十四カ所の

フリーキンダーガルテンが存在していた。一九二〇年代には、他のいくつかの町（インヴァーカール、ハミルトン、ヘイスティングズ、ロウワーハット）にもフリーキンダーガルテン運動は波及し、わずかに設立されていた。一九二六年には、ニュージーランド・フリーキンダーガルテン連盟が結成されたが、具体的な活動はほとんど展開されなかったようである。一九二〇年代末には、全国で約二十数カ所のフリーキンダーガルテンがみ

られ、三〇年代末には、約三十数カ所となった<sup>(8)</sup>。

### (1) キンダーガルテン運動の発展

この時期のフリーキンダーガルテンは量的には非常にわずかなものであるが、その前の三十年間、すなわち、この国にフリーキンダーガルテンが創設されて運動の基礎が確立されていく時期（一八八九年から一九一九年までの三十年間）に時かれた運動の種は少しずつ芽を出し、キンダーガルテンの数は増加していった。一九二〇年、三〇年代のキンダーガルテンは、量的にはわずかな増加にすぎないが、運動の普及、発展にとっては非常に重要な要素を含んでいた。結論的に言うならば、それまでは、ごく一部の社会的関心に目ざめていた人々が運動をになっていたが、それが次第に、一般市民にもキンダーガルテンの問題を提起し、その支持の輪を少しずつ広げ、さらに、キンダーガルテンに子どもを送る両親たちの積極的な関心呼び起こし、キンダーガルテンの管理、運営をにぎる地区委員会は両親たちによって占めら

れる割合が急増し、キンダーガルテンは、保護を必要とする子どもたちのために設けられるものから、ごく一般の子どもたちにとって必要なものと考えられるようになっていったのである。

一九二〇年、三〇年代は、政治的にも経済的にも不安定な時代で、特に三〇年代前半は世界大恐慌の影響を受けて、非常にきびしい状況がみられた。一九三五年に政権の座についた労働党は、西側世界に先がけて総合的な社会保障制度を着々と作り上げていったのであるが、すでにこの国では、十九世紀後半から少しずつ児童保護政策は展開されていた<sup>(9)</sup>。そして、一九二五年には、児童福祉法（内容的には児童保護が主たる関心であった）が制定され、児童福祉に対する国家責任が確認され、教育省内に児童福祉局が創設された。さらに翌二六年には、家族手当法が制定され、児童福祉を要保護児童から児童全体を対象とするものへ、その方向づけがより明確化されていった。

国家が児童保護、児童福祉に対して責任をもつ、とい

う考え方が確認されていく時、当然ながら、(教育とともに) 貧しい子どもたちの必要に応じてその運動が発生、展開していたフリーキンダーガルテンもまた、この考え方に影響されることになる。特にウェリントンにおいては、一九二四年、財政が熟した時点で政府がキンダーガルテンの全責任を引き受けることについての議論が多くなされ、協会関係者、視学長ならびに教育大臣などがその論議にかかわった<sup>(4)</sup>。しかし、キンダーガルテンを政府が引き受け、すべての公立小学校にキンダーガルテンを付設するには、莫大な費用がかかることであつたので、それは不可能なことであつた。それどころか、幼児ひとりあたりの年額助成金(均等割)が、三ポンド二シリング六ペンスから四ポンドに引き上げられていたのだが(一九二四年)、不況時の一九三一年には、すっかり廃止されてしまつた<sup>(5)</sup>。そして、一九三五年、助成金は再交付されることになり、助成総額も順次増大されていったけれども、その総額は全体的には低いものであつたために、現実には、ごくわずかな助成にとどまってい

た<sup>(6)</sup>。

こうしたきびしいなかで、フリーキンダーガルテン運動は、ゆっくりとした歩みではあつたが、四都市を中心にして着実に展開していき、地方の小さな町にもわずかながら波及していった。その原動力は、運動をになう人々の善意であつた。そして、それは地域の両親たちの関心を次第に呼び起こしていった。

なお、当時のキンダーガルテン教師の養成は、四都市にあつた四カ所の養成所でなされていた。養成所は、独自の建物があつたわけではなく、協会内のフリーキンダーガルテンのひとつがそれを兼ねていた。学科目ならびにその時間数は養成所ごとに異なっていて、政府からは何ら援助もなければ統制もなかつた。養成所独自に試験をし、独自の免許状を交付していた。養成プログラムの中心は、協会内のキンダーガルテンにおいてなされる実習(毎日午前中になされた)で、事実上、学生たちはキンダーガルテン教師の助力者の役割をしていた(なお、学生たちは養成費用を支払っていた)。学生たちは、午

後は養成所で講義を受けたり、専門学校の授業に出席したりした。当時の養成所には所長がひとりいただけであった（何人かの非常勤講師はいたが）。所長は、協会によって雇用され、養成面とともに協会内のキンダーガルトンの指導、監督にも責任を負っていたが、給与は低いものであった。多くのキンダーガルトンが賃借建物で開かれていたので、使用後はその都度、遊具や備品類を片づけていた（そして、朝、それらを取り出して設置していた）。そのため、学生たちは、すでに午後には身体的に疲労していた。このように、教師養成は困難な状況のなかでなされていたので、養成を受ける学生の数もあまり多くはなかった。

では、次に、この時期の各地の具体的な運動の展開をみてみよう。

## (2)各地のキンダーガルトン運動

ダニエデンにおいては、一九二二年、二四年に、第

四、第五番目のキンダーガルトンが設立された<sup>④</sup>。一九

二六年には、一九〇八年に設立されていたキンダーガルトンが新たにハドソンキンダーガルトンとして専用園舎にて開始したが、不況時には一時的に閉鎖された。

クライストチャーチにおいては、一九二三年には五カ所のキンダーガルトンがあった。この年、サッカー夫人が協会長に、ハドフィールド夫人が名誉会計係になり、さらに一カ所、キンダーガルトンが開設された。協会ならびに地区委員会が資金集めの活動を積極的に展開していたために、ここでは、不況時にも閉園されることはなかった。しかし、養成所卒業生の求職はむつかしく、何人かは私的なキンダーガルトンを開き、不況時の学齢引き下げに伴って（一時的に）小学校から締め出されていた、五歳児の世話をしていたという。そして、一九三四年、三九年には、第七、第八番目のキンダーガルトンが開始された。また、一九三六年には、ハル嬢が、二十五年間在職の後、養成所長ならびに監督者を退職し、（前年、カーネギー奨学金を得て渡米していた）ウィルキー嬢（R. Wilkie）が、その後任となった。ウィルキー嬢

は、養成面では、学生たちの手づくり遊具製作を積極的に指導したり、毎年、病院や盲学校の見学を実施したりした。さらに、女学校の生徒がキンダーガルテンを見学する機会をつくったり、母親クラブの育成に務めたり、最初のキンダーガルテン関係年代史を編集、出版したりした。

ウェリントンにおいては、一九二一年には五カ所のキンダーガルテンがあった。二四年にはギル夫人が（十五年間に在任の後）会長を辞任し、三四年にドクター夫人がそれに就任するまで、会長はあわただしく三回も交替したが、ふつう、協会の仕事は、有産階層のパトロンともにも多くの者が長期間に渡り、無報酬でなしていた。一九二〇年代の年次報告書には、「キンダーガルテンは、ある一定の目的を満たすためにエネルギーを用いる習慣を子どもたちに教え、〈有益な生活〉の基礎を築くことを目的にしている」と記されている<sup>⑧</sup>。それは、「喜びのための遊びの理想は、次第に、労働のための労働への願いに變形される」というプロテスタント倫理に基づい

たキンダーガルテン哲学であった。また、協会は、両親教育を重視し、一九二九年までに母親クラブをすべてのキンダーガルテンにつくり、以後、一九三〇年代は母親教育に積極的に取り組んだ。母親クラブは、資金集めを目的とするものではなかったが、不況時には資金集めの活動をしてキンダーガルテンの運営を援助した。なお、不況時にはキンダーガルテンの教師は自ら減給し、無給で働く養成所卒業生もみられた。

一九三九年には、協会は、両親や教師たちを対象にして『子どもたちとともに生きよう』という小冊子を発行した<sup>⑨</sup>。この小冊子の名称は、キンダーガルテンの創始者として有名な、ドイツ人のフレーベルが、普及運動のなかで好んで使用した標語として、よく知られているものである。一九三〇年代末には、ウェリントンにはわずか九カ所のキンダーガルテンがあったのであるが、この小冊子は、その頃の児童心理学、進歩主義教育学の研究をとりいれた良心的な編集で、両親や教師たちにとって有益な内容であったのではないかと思われる。イギリス

の進歩主義教育学者のスーザン・アイザックス (Susan

Isaacs, 1885-1948) が、一九三七年に、ニュージール

ドを講演旅行で訪ね、子どもたちの自発的な活動が、発

達上、いかに重要なものであるかを説いたのであるが、

この小冊子は、その原理に基づいて、家庭、親子関係は

どうあるべきかをわかりやすく話し、両親や教師は子ど

もたちをいかに理解すればよいのかについて具体的に説

明し、さらに、子どもの遊びの重要性を説いている (な

お、ここにはアイザックスの文章もひとつ掲載されてい

る)。そこには、幼児にとって友だちとの遊びは、発達

上、欠かせないもので、そのためキンダーガルテンはす

べての幼児にとって必要なものであることが記されてい

る。しかし、現実にはキンダーガルテンは非常に少な

く、また、幼児の自発活動重視の教育はまだほとんどみ

られず、多くは教師指導型の形式的なプログラムがなさ

れていた。とはいえ、この小冊子は、ウェリントンのみ

ならず、この国のキンダーガルテン運動にとって重要な

役割を果たしたであろうし、(次の時代への) 貴重な財

産になったであろうと思われる。

オークランドにおいては、一九二五年、二八年にそれ

ぞれ二カ所のキンダーガルテンが設立され、合計七カ所

になり、不況時の後、一九三六年以降は、定期的に増設

されたようだ。一九二五年には、オークランド・フリー

キンダーガルテン協会内部で養成、育成されたコールグ

ロブ嬢 (G.M. Colegrove) が、養成所長ならびに監督

者に就いた。なお、コールグロブ嬢は、一九三五年、

三六年に、カーネギー奨学金を得て渡米した。

インヴァーカーギルにおいては、一九二一年に、婦人

委員会ならびに (男性) 助言委員会が設置され、多くの

人々からよせられた寄付をもとに土地ならびに家屋を購

入、改造し、最初のキンダーガルテンが設立された。教

師の給与が非常に低かったために、家屋の後部は宿舍と

して残されていた (これは後に「子どもの家」として知

られた)。このキンダーガルテンは、毎日朝九時から午

後二時まで開園されていて、子どもたちは昼食を持参し

ていた。地元住民ならびに地区委員会の努力の結果、一

一九二六年、二七年には、第二、第三番目のキンダーガルテンが設置された。一九三二年には第四番目のキンダーガルテンが設置されたが、大通りに面して危険であったために、教育省の助成が認められず、わずか一年で閉鎖された。一九三三年には、不況時であったにもかかわらず、クー地区の親たちが地区委員会をつくり、熱心に資金集めをし、ついに一九三六年には、全く政府の財政援助を受けないで専用園舎を建てた。また、この年にはすべてのキンダーガルテンに母親クラブが形成されたが、すでに親たちが地区委員会の中心的なメンバーになっていた。さらに、一九三八年には、専用園舎をもったキンダーガルテンが開園された。

ハミルトンにおいては、一九二一年に最初のフリーキンダーガルテンが開設され、教師養成が開始された。しかし、委員会の努力にもかかわらず、一九二三年には閉鎖されてしまった。

ヘイスティングズにおいては、一九二八年に公の会議がもたれ、翌年に最初のキンダーガルテン（三十八名の

幼児で）が設立された。母親クラブは、イス、テーブル代として三ポンド寄付したという。三三年には、幼児は六十四名に増加した。なお、当時の教師の給与は年額一四ポンド、助力者は二〇ポンドならびに一〇ポンドであった。このキンダーガルテンは賃借建物であったために、以後、場所はあちこちに移動した。

ロウワーハットにおいては、一九二八年に最初のフリーキンダーガルテンが開園された。続いて、地区委員会が設立され、第二番目のフリーキンダーガルテンが開設された。このふたつのキンダーガルテンの母親クラブは互いに協力して、よく活動をしたらしい。

なお、ブレンハイムにおいては、すでに一九二一年からキンダーガルテン設立の動きがあったが、適切な建物を得られず、ようやく一九三〇年に、教会ホールにてセンターが開設された。しかし、不況時の政府援助廃止に伴い、センターは閉鎖され、三九年には再開の望みもみられたが、戦争勃発のために計画は延期されてしまった。

以上、一九二〇年、三〇年代の各地のフリーキンダーガルテン運動の具体的な展開をみてきた。フリーキンダーガルテンを設立しようとする時には、その地域が始めての場合は、まず公の会議を開き、地域の人々の支持を得なければならぬ。それから、委員会ないしは協会を設置する。すでに協会の活動している地域では、その援助がみられるだろう。続いて、地区委員会を設立し、場所ならびにスタッフの選定をしつつ、資金集めをしなければならぬ。キンダーガルテン設立の後も、資金集めの活動は手を休めることはできず、それどころか、専用園舎建設に向けて努力が続けられた。その後も、新しい地区の委員会を援助するために活動は続けられた。次第に、地区委員会の中心的なメンバーは親たちが占めるようになり、運動をになっていった。自身の子どもが卒園した後にも運動を支え続けていく者も、めずらしくはなかった。場所の確保ならびに建設問題、スタッフの確保、その給与の支払い、さらに運営の方法などは、欠けてたやすいことではなかったが、地区民の支持、援助を

獲得しつつ、親たちはそうした困難さにも粘り強く取り組んでいった。婦人たち、母親たちが運動を中心的にこなっていたが、男性たちもいろいろな形で運動に参加していた（助言者として、地区委員会のメンバーとして、そして父親として）。（山口女子大学）

註

(18) 第二次大戦前のフリーキンダーガルテンの統計は教育省にも正確なものに残されていない。ここでは、ロックハートの前掲書にみられる各地域の運動の記述を始め、いくつかの文献を参照しておおよその数をあげた。

(19) ニュージールランドの児童福祉に関しては、小松隆二著『理想郷の子供たち』（論創社、一九八三年）に詳しい。

(20) Meade; *op. cit.*, p. 116.

(21) Early Childhood Care and Education: A Report of the State Services Commission Working Group, (The Cory-Wright Report), Wellington: State Services Commission, 1980, p. 2.

(22) Meade; *op. cit.*, p. 118.

(23) 以下の記述は、特に注のない限り、ロックハートの前掲書を参照した。

(24) Meade; *op. cit.*, p. 116.

(25) Wellington Free Kindergarten Association (ed.): Let us live with Our Children! Wellington Free Kindergarten Association, 1939. 筆者は幸運にも教育省の好意でこの小冊子を手に入れることができた。